

安全安心マップ作成を通じた子どもの防災・安全教育の課題と今後の展望

—第17回みんなでつくる地域の安全安心マップコンテスト事業報告—

宮崎 彩*・李 敏*・花岡 和聖**・村中 亮夫***

I. はじめに

2023年は、世界各国で地震や気候変動の影響が垣間見られるような大規模な山火事、大雨などの自然現象に見舞われた。2月6日のトルコ・シリアではM7.8¹⁾を、10月7日・11日にはアフガニスタンでM6.3²⁾を、11月3日にはネパール³⁾でM5.6の地震を観測した。これらは既に内戦などによる恒常的な危機にさらされ、経済的に困窮する地域も多くあることから、対策の不備や支援が行き届かない政治的な事情による事態の悪化を招いている。2023年春から続く6,500件以上の山火事により、カナダでは1,850万ヘクタールが燃焼しただけでなく、隣国にも広がる大気汚染によって健康被害を引き起こしている⁴⁾。7~8月の乾燥期には、地中海に面したギリシャ⁵⁾、イタリア⁶⁾、スペイン⁷⁾で大規模な山火事が今年も発生し、死者を出したことから、恒常的に当該地域で火災が起こる原因や対策について考えなおす必要性が出ている。現地報道より8月8日から11日にかけて続いたハワイ・マウイ島の自然火災では、警報が鳴らず、逃げる手段を失い亡くなった被害者が100人近くに上り、歴史地区を含む2,200軒以上の建築物が焼失するというアメリカ史上でも最大級の火災となった⁸⁾。これらの様々な災害が起きている中で、防災対策・設備の整備のみならず、地域住民が恒常的に災害に対する意識を持ち、準備することも必要であろう。

一方、防災対策が進んでいる日本においても、2023年は統計上記録的な気温を更新する一年となり、これまでの対策に加え、気候変動を想定した対応も防災の一環として考える必要性が明るみに出たといえる。例えば、大雪に対する国土交通省の緊急発表が1~2月に2回出され、東日本日本海側の冬の降水量は例年より多くなったのに対し、それ以外の地域においては例年より降水量

の少ない冬となった⁹⁾。それに対し、2022年6月より始まった線状降水帯による大雨災害の半日程度前からの呼びかけは9月29日時点のデータで23回発令されるなど、3時間に150ミリを超える大雨が多数観測された¹⁰⁾。また、春(3~5月)、夏(6~8月)ともに平均気温は統計を開始した1898年以来最も高くなり、春は日本の平均気温基準値の偏差が+1.59℃を、夏は+1.76℃を記録しただけでなく、日本近海の平均海面水温も春時点で平年差+0.6℃という統計を開始した1982年以降第3位タイを記録した¹¹⁾。このような気候変動の状況により土砂災害や風水害、また雪害などの災害リスクが増幅していると予想される。

気候変動による気象の変化に伴う災害を想定した事前の避難呼びかけや気象データ・地殻データのモニタリング制度を改めるという取り組みは各省庁でみられるものの、想定されてこなかった自然活動の変異には今後ますます柔軟な対応を求められることとなろう。例えば避難経路の整備及び避難場所の指定、避難情報伝達システムの用意、避難手段・誘導方法の検討など避難体制を構築するだけでなく、住民による避難経路・場所の認識なども含めた対策が望ましい。

また、従来より対応を迫られている地震や土砂災害も記録された。気象庁によると5月5日には能登半島沖でM6.5とM5.9を、26日には千葉県東方沖でM6.2¹²⁾を、6月11日には苫小牧沖でM6.2¹³⁾を、10月5日には鳥島近海でM6.5¹⁴⁾の地震を記録し、同様に火山活動も全国でみられた。土砂災害も全国各地で観測され、10月31日時点で1,410件を記録しており、これまで累積して死者8名、負傷者17名の他、家屋被害は250件を超える¹⁵⁾。日本国内外において、気候変動により高まる自然災害リスクと対峙する為には、従来のリスクに加えて災害の引き金となる線状降水帯、集中豪雨、大雪などを想定した分析と対策が益々重要になろう。

これらの気候変動や自然災害による人々へのインパクトを軽減する為のカギとして、コミュニティ、学校、家

* 立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員

** 立命館大学文学部 准教授

*** 立命館大学文学部 教授

族、個人レベルでの防災教育の重要性が指摘されており、特に学校教育に防災プログラムを導入することで、知識やスキルの伝達のみならず、コミュニティの発展、ネットワーク形成や意識向上につながる事が指摘されている¹⁶⁾。その反面、学校での防災教育の質を高めるためには、教員の気候変動や災害に対する専門的な知識と理解を高めるための支援の必要性や、生徒たちが家庭やコミュニティで学んだことを実践するための工夫も指摘されている¹⁷⁾。学校での防災教育は自然災害の多いインドネシア、ニュージーランドなどの地域で近年取り入れられていることがこれらの研究から明らかになっている。

このような災害リスクの拡大に対するコミュニティや家族単位での身近な地域における安全安心の備えが、自然災害や事故を未然に防いだり、被害を軽減するうえで不可欠となるという観点から、立命館大学歴史都市防災研究所（以下、当研究所）は小学生を対象に「みんなで作る地域の安全安心マップコンテスト」を主催している。2023年度は第17回目の開催となった。2007年度より開催される本コンテストでは、子どもと大人が一緒になって地域を歩き、身近な地域における危険・安全箇所を確認することで地域防災力の向上を図ることを意図している¹⁸⁾。過年度の作品には、「ほくもヒーローになる車いす・ベビーカーたすけマップ」（最優秀賞）、「もしも、箕面まつり開催中に緊急事態が起きてしまったら（大地震などの自然災害やケガ・病気など）」（優秀賞）、「工事中 広島駅の安心・安全マップ」（入選作品）など、子どもたちの地域に根差した目線から作成された独創的なマップが多数みられた¹⁹⁾。これらのマップに共通するのは、それぞれの普段過ごす生活圏において、ケガをしたことで見えた視点や、普段の交通手段や地元で参加している祭りにおける災害や事故による被災する可能性に目を向けることで、災害への対策や考え方がいかに変わるかについて示唆を提供している点である。学校教育の外において、実際の生活に根差した地域について、児童と大人が共同で調査をし、住民防災意識の向上や考えを育んでいく本コンテストの意義は大きく、当研究所の基幹事業の一つとして今後も発展させていくため、本稿では過年度の事業報告と対比可能なかたちで、2023年度のコンテストの実施内容と応募代表者（保護者・大人）に対するアンケートの結果を報告・記録したい。そのうえで、これまでの課題を踏まえたうえで今後の可能性について結論にて述べることにする。

II. 事業概要

1. 応募資格

本コンテストの応募資格は、小学生の個人または児童4名以内のグループである。本コンテストは、参加した子どもと大人がそれぞれ異なる視点から地域の安全安心について一緒に考え、安全に調査をしてもらうことを念頭に、保護者、あるいは成人が1名以上付き添うことを条件にしている。なお、2018年度（第12回）から英語での応募も受け付けを開始しており、日本国内外からの作品を受け入れている。

2. 安全安心マップのテーマ

安全安心マップは、児童にとって身近な地域の安全安心について自由な発想に基づいて考えてもらうため、防災や防犯、事故防止など、地域の安全安心に関する内容であればテーマは問わない。応募者の参考になるよう、当研究所のWebサイトでは、地震や洪水などの自然災害発生時の避難経路・場所を示した防災マップや通学時の交通安全マップ、犯罪が起きそうな場所を示した防犯マップ、子どもの遊び場の安全安心マップ、子どもや大人からみたヒヤリハットマップなどを例示しているだけでなく、これまでの作品も掲載している。対象とする地域のスケールについても、各自のテーマに応じて自由に設定でき、作品の趣旨が分かるようにタイトルを付けることも求めている。作品のサイズはB0程度、一辺の長さ80cm～146cm（画用紙～模造紙大の大きさ）程度とした。応募申込用紙とアンケート用紙と合わせて歴史都市防災研究所にマップを郵送してもらった。

3. 応募期間と広報活動

応募期間は、2023年8月21日（月）～2023年9月27日（水）とした。同期間は、①子どもと大人が一緒になって地図作りに取り組みやすい夏休み期間であり、②作成した地図を小学校の夏休みの自由研究の成果として小学校に提出し返却してもらうまでの十分な時間であることの2点を想定した設定となっている。

広報活動では、紙媒体の郵送による方法として、2023年5月頃より京都府内外の小学校や大学の研究室、官公庁、図書館、防災教育・伝承施設のほか、協賛・後援をいただいている企業・団体・組織・機関などに宛てて、本マップコンテストの募集要項やポスター、チラシを送付した。

さらに、当研究所では、地域の学校や行政、企業、団体・組織などからの依頼に基づき、安全安心マップ作成活動を広める出張授業を様々な企業や他大学の教員方と共に実施しており、本年度は、2023年11月17日現在、7件の出張授業を行った。5月20日（土）に瀬戸内海小豆島の土庄小学校の先生方に向けた近隣エリアにおける「安全安心マップ&防災教材作成のための防災まち歩き」を、7月1日（土）に洛星高等学校1年生8名を対象に防災がテーマの地域調査の方法を教える高大連携講座を、8月5日（土）、6日（日）に大阪府豊中市の「せんちゅうパル」で開催された「自由研究ストリート」で防災マップ作り体験とガス管万華鏡づくりのワークショップを、8月8日（火）に京都トヨタ GR ガレージ京都伏見で開催された小学生向けイベント『地理学の先生から学び、「地域の安全安心マップ」を作る』で講師を、8月29日（火）に北海道奥尻高等学校2年生21名を対象に防災まち歩きの特別授業（高大連携講座）を、10月22日（日）に立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催されたAsia Weekの企画内で「子どもの安全を子どもと大人と一緒に考えて考える—子どもの性被害（防犯）、交通安全、防災—」を、そして11月7日（火）に朱雀高等学校2年生16名を対象に京都の災害や避難所運営を学ぶ防災授業を実施した。

4. 関連企業・団体・機関の協賛と後援

本コンテストの実施にあたって、株式会社パスコ、フレントカー株式会社、株式会社帝國書院、株式会社ネスト・ジャパン、NPO法人災害ボランティアステーション日本、マツモラ産業株式会社、株式会社宝水、セコム株式会社、株式会社柴橋商会、能美防災株式会社、奥尻島観光協会、株式会社サンオート、ウェストロ株式会社、やまと産業株式会社、アキレス株式会社、株式会社コバック、株式会社宮田運輸、ヤマハ発動機株式会社、京都トヨタ自動車株式会社、株式会社アイシン、西日本旅客鉄道株式会社（順不同）から協賛を得、各企業・団体・組織から入賞者に対する副賞のほか、参加者向けの参加賞の提供を受けた。また、国土交通省国土地理院、京都新聞、KBS京都、京都市、公益財団法人京都市景観・まちづくりセンター、一般社団法人人文地理学会、立命館地理学会、京都府警察、一般社団法人日本セーフコミュニティ推進機構、国土交通省近畿地方整備局（順不同）から後援を得た。

Ⅲ. コンテストの結果

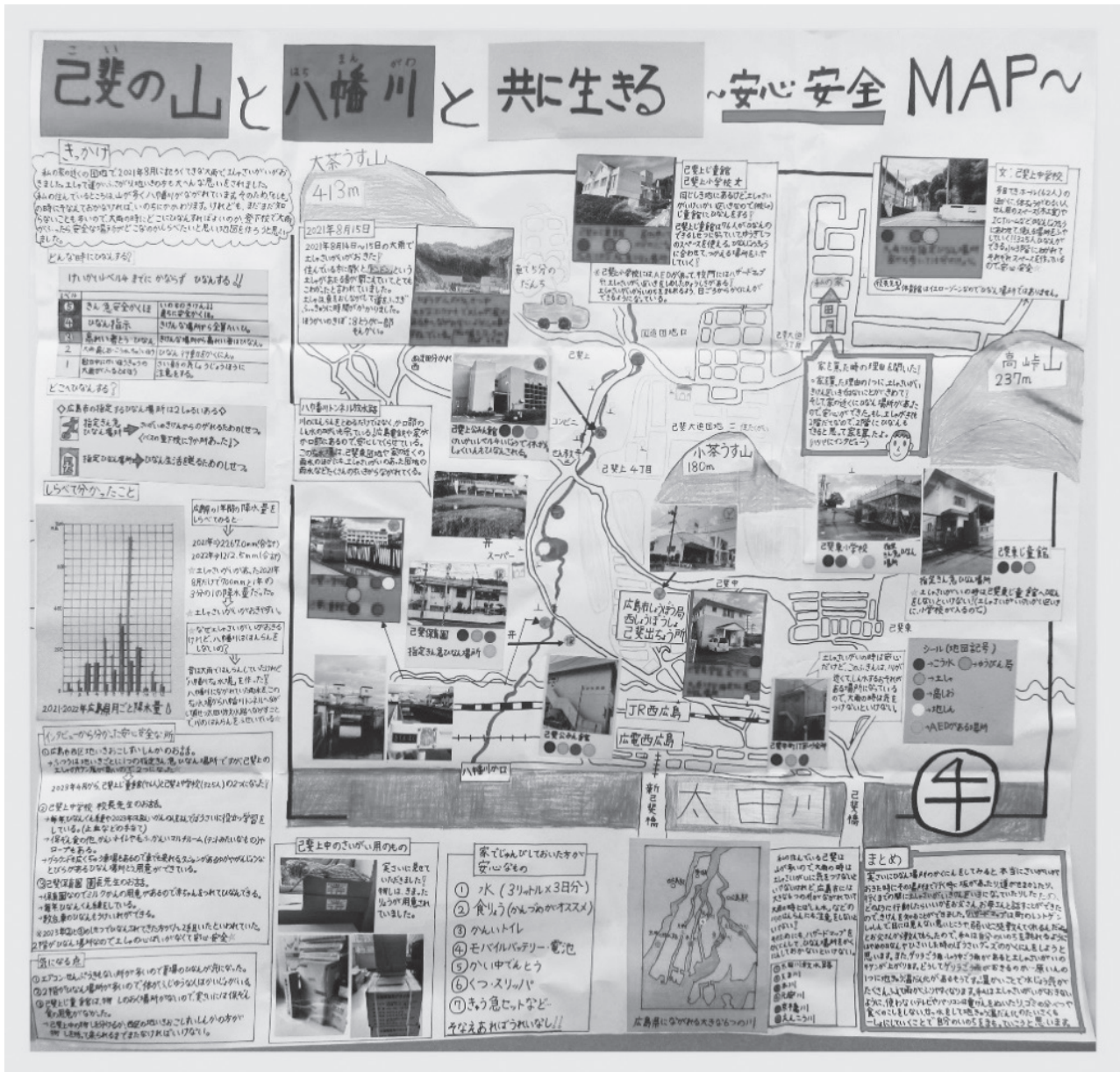
1. 応募数

2023年度は、全国から41名の小学生（内男子20名、女子21名）が作成した33点の作品が集まった。第7回以降はおおむね50点前後の作品数で推移し、過去4年に着目すると2019年度は47点、2020年度は60点、2021年度は30点、2022年度は39点の応募が得られており、本年度もこれまでと同程度の作品が集まった。応募者の居住地（n=33）は、広島県（13グループ、13名）、京都府（4グループ、4名）、宮城県（4グループ、4名）、埼玉県（各3グループ、3名）、福島県（2グループ、2名）、静岡県（2グループ、8名）、愛知県、群馬県、北海道（各1グループ、1名）、神奈川県、東京都（各1グループ、2名）であった。

応募形式（個人・グループ別）をみると、個人での応募が29点（87.9%）、グループでの応募が4点（12.1%）となり、本年度も昨年度同様個人での応募が多かった。応募者の学年についてみると、4年生が14名と最多で、次いで5年生が9名、6年生が6名の他、1年生から3年生が各4名であった。今年は高学年が多く、これまでの中学年に集中した数字から少し異なる結果となった。

2. 審査方法・結果

応募作品は、文化遺産や防災まちづくり、セーフコミュニティ、地理情報など、学内外の専門家11名により審査された。審査項目は、応募要項に明示されている通り、① [文章・図表の表現]：文章や地図、図表の表現が明確であり、分かりやすいかどうか、② [目的・主題の明確さ]：目的・主題（テーマ）が明確なものとなっているか、③ [独自性（オリジナリティ）]：革新性・アイデア性・作成にあたっての工夫がみられるか、④ [全体の構成]：文章や地図、図表のバランスが取れた作品であるかどうか、⑤ [データの充足度]：十分な地域情報の収集がなされているかの5つの評価軸である。例年と同じく、これら5つの評価に基づいて各審査委員が評価を行い、それら11人分の評価結果を集計したうえで高得点作品をピックアップし、再度審議のうえ、最優秀賞・優秀賞・入選・佳作を決定した。審査の結果、最優秀賞1点（第1図）、優秀賞1点、入選3点、佳作5点の入賞作品10点が選ばれた（第1表）。これら入賞作品のうち7作品は、全国児童生徒地図作品展連絡協議



第1図 最優秀賞作品「己斐の山と八幡川と共に生きる～安心安全 MAP～」

第1表 「第17回みんなでつくる地域の安全安心マップコンテスト」受賞作品

No.	受賞名	学年	応募形式	作品タイトル
1	最優秀賞	3	個人	己斐の山と八幡川と共に生きる～安心安全 MAP～
2	優秀賞	5	個人	子どもも大人も視覚障害がある方も安心して過ごせる町へ
3		4	個人	抜け出せ事故の多い町ルールを守って安心・安全マップ自転車編
4	入選	5	個人	開かずの踏切の観察と研究
5		1	個人	消防車出動！この道、とおれる？
6		5	個人	桂坂 お散歩マップ〈京都市西京区〉
7		4・2	グループ	歩道に横断旗をおこす
8	佳作	4	個人	防災サイレンきこえ方マップ
9		4	個人	もしも、体が不自由になったときでも安心・安全マップ
10		6	個人	高崎防災マップ ～災害から命を守るためには～

会（事務局：国土交通省国土地理院）主催の「第27回全国児童生徒地図優秀作品展」へ推薦した。

本年度の応募作品は、例年²⁰⁾と同じく、児童の身の回りの道路状況や交通事故、横断旗、避難場所に着目した安全マップのほか、水害、地震、土砂など地域で頻発する自然災害に着目した地図が多くみられた。今回の受賞作品は中でも具体的なケースに焦点をあてたものが選ばれた。最優秀賞作品「己斐の山と八幡川と共に生きる～安心安全MAP～」は山と川に囲まれた土地の災害に対する脆弱性を指摘しながら、様々な危険地域の指定と避難区域・設備を配置し、複数の情報から一つのマップを効果的に作成していたほか、優秀賞作品「子どもも大人も視覚障害がある方も安心して過ごせる町へ」は災害弱者が安心して生活できる空間をマッピングしている。入賞・佳作作品の中には、毎日同じ時間に違うポイントから防災サイレンを聞いて聞こえ方を記した「防災サイレンきこえ方マップ」や「開かずの踏切の観察と研究」のように普段の生活圏で不便な状況を具体的に踏切の開閉時間を測ることで調査するなど、児童の身近な疑問に基づいて作成された地図もみられた。

3. 表彰式・作品展示

入賞作品10点の応募者11名に対して、2023年10月21日（土）に立命館大学創思館カンファレンスルームにて表彰式が開催された。立命館大学では、2023年3月31日をもって「新型コロナウイルス感染拡大に対する立命館大学の行動指針（BCP）」の運用が停止されたものの、受賞者や協賛・後援の企業・団体・組織の関係者が授賞式へ参加しやすいよう、今年も、ハイブリッド形式（対面形式とウェビナー形式の併用）での開催とし、遠方に住む受賞者だけでなく協賛企業も一部オンラインで参加された。表彰式の様子は当研究所のウェブサイトから配信するとともに、全応募作品（現物と一部、第27回全国児童生徒地図優秀作品展への応募作品は複製）と歴代の受賞作品の一部を当研究所1階の展示ルームで2023年10月23日（月）から12月22日（金）にかけて一般公開した。

授賞式では、当研究所からは受賞者に対して表彰状と参加賞が、各協賛企業・組織・団体からは副賞が贈呈された。また、毎年複数の作品を学校として提出し、この事業へ長年貢献している広島大学附属小学校に対して、感謝状が贈られた。その後の表彰式では、各受賞者が作

品の紹介を行い、それに対して審査委員の代表から講評が行われた。表彰式の最後に受賞者、保護者、関係者による記念撮影が行われ、表彰式の会場に展示された作品を自由に見学できる時間を設けた。

IV. 安全安心マップ作成の意義と課題

1. アンケートの概要と回答者の属性

第17回のマップコンテストでは、過年度と同様、作品を応募する際に応募代表者（保護者・大人）に対してアンケート調査への協力を求め、マップに同封の上、マップコンテストの期間に参加者より郵送された。本アンケートは歴史都市防災研究所が安全安心マップコンテストの事業評価のために実施されたものであり、結果は本報告の他、安全安心マップを通したリスク認知の研究資料として活用されることを目的としている。調査票は、参加児童および応募代表者の属性、本コンテストへの参加動機、マップ作成活動後の意識、居住地域の安全安心に関する取り組み、マップ作成の意義と課題の5項目で構成した。調査票の回収数は30通であった。本年度は41名から33点の作品の応募が得られたが、調査票の回収率は90.9%（30件）である。回答者の属性をみると、性別（ $n=30$ ）については男性が8名（26.7%）、女性が22名（73.3%）、欠損値が1名（3.3%）と昨年同様女性が多く、参加児童との関係（ $n=30$ ）については父母が30名（100.0%）となった。

参加児童や応募代表者のこれまでの被災経験（自然災害、事故、犯罪など）の有無（ $n=30$ ）をみると、17件（56.7%）が被災経験を有しており、具体的な内容としては、地震災害（東日本大震災、阪神・淡路大震災、北海道東部地震、平成5年8月鹿児島豪雨）や交通事故、空き巣に起因する被害などが挙げられた。同じく参加児童や応募代表者のこれまでの被災経験（自然災害、事故、犯罪など）の体験談を聞いたことの有無（ $n=30$ ）については、25件（83.3%）が体験談を聞いたことがあると回答し、具体的には、地震災害（東日本大震災、阪神・淡路大震災、関東大震災）や豪雨災害（西日本豪雨、長崎大水害など）、土砂災害、大雨による冠水・浸水被害をはじめとする自然災害のほか、学校や地域、メディアを通じた防災・防犯・交通安全教室、身の回りで起きた事故などが挙げられた。半数以上が既に災害を経験したり、聞いていることが分かった。

2. 参加動機と情報入手方法

本コンテストへ参加しようと思った動機 (n=30、複数回答含む) をみると、「地域の安全安心に興味があったから」が17件 (56.7%)、「夏休みの自由研究として」が12件 (40.0%)、「防災や防犯を学習しなかったから」が9件 (30.0%)、「夏休みの宿題だったから」が7件 (23.3%)、「副賞が魅力的だったから」が4件 (13.3%)、「その他」が2件 (6.7%)、どちらも (防災) マップに児童が興味を持ったから) であった。これら参加動機については、過年度の事業報告においても主に宿題や夏休みの課題として取り組まれる事例と、地域の安全安心や防災・防犯への関心を動機とする事例の2つに大別して整理されてきたが、本年度も過去4年の傾向²⁰⁾と同様の傾向が確認された。

本コンテストの情報を入手した方法 (n=30、複数回答含む) については、「学校の配布物」が16件 (53.3%)、「歴史都市防災研究所のホームページ」が6件 (20.0%)、「友人 (学校)」が2件 (6.7%)、「友人 (近所)」が1件 (3.3%)、「その他」が5件 (16.7%) となり、「情報誌『あつまれ! 京 (みやこ) わくわくのトビラ』 (旧『GoGo 土曜塾』)」と「友人 (仕事)」はいずれも0件 (0.0%) となった。「学校の配布物」と「歴史都市防災研究所のホームページ」の割合が高い点については、過去4年の状況²⁰⁾と同様の結果となった。「その他」5件のうち4件はインターネットで情報を得たとの回答があり、そのうち1件は「『防災マップ』を応募できるコンテストをインターネットで検索しました」とのことであった。また、1件は「ちびむすのページ」との回答であり、教育教材やインターネットの広告・情報共有も応募につながっていることが確認された。

3. 地域の安全安心に対する認識

自分自身が作成した安全安心マップに、どのような災害・危険事故や犯罪などの情報を掲載することが重要だと思うかについて、3つほど挙げてもらったところ (n=30、3つを上限に複数回答可) (第2表)、「交通事故」が18件 (60.0%)、「避難場所」が10件 (30.3%)、「地震」が9件 (30.0%)、「洪水」が7件 (23.3%)、「声かけ・不審者」が6件 (20.0%) であり、「交通事故」と「避難場所」の上位2つについては過去4年の傾向²⁰⁾と同様に重視される傾向が確認された。「その他」も10件あり、「熱中症」、「AED設置場所」、「登下校時の危

第2表 マップに掲載すべき情報

	度数	割合
火事	1	3.3%
地震	9	30.0%
津波	3	10.0%
火山	0	0.0%
洪水	7	23.3%
豪雪	0	0.0%
土砂災害	4	13.3%
ひったくり	1	3.3%
声かけ・不審者	6	20.0%
交通事故	18	60.0%
交番・消防署	2	6.7%
避難場所	10	33.3%
転倒の危険	4	13.3%
子ども110	5	16.7%
その他	10	33.3%

n=30 (3つを上限に複数回答可)

険・関係者の声」などが挙げられていた。

次に、安全安心マップの作成を通じて思った地域の安全 (安心) の状態 (n=30) についてみると、「やや危険」が18件 (60.0%)、「とても危険」が2件 (6.7%)、「やや安全」が7件 (23.3%)、「とても安全」が0件 (0.0%)、「どちらでもない」が3件 (9.4%)、となり、(やや) 危険と感じている保護者が60%以上であったことを強調したい。ここから、安全安心マップの作成を通じて応募者の地域における安全・安心状況に対して認識ができていく様子がみられた。なお、過去4年間の調査では「やや危険」と「やや安全」が高い割合を示している。そのうえで、安全安心マップの作成を通じて地域の安全安心について気付いた点を見ると (第3表、n=21)、交通事故につながる可能性のある場所・道路・状況 (No. 1、2、3、4、5、9、11、13、14、15、16、19、21) が多く、その他にはハザードマップや避難場所など災害を想定した対応 (No. 6、7、8、18、21)、サイレン (No. 20)、身体の不自由な人のアクセス (No. 10) が挙げられた。

安全安心マップの作成を通じて確認できた地域の安全安心に対する応募代表者と児童との認識の違い (n=25) についての間では、子どもと大人との認識の違いに関する25件の回答が得られた (第4表)。大人と子どもでは同じ対象に対する意識の違いがあることを再確認しつつ (No. 5、8、11)、大人以上に子どもの方が脅威を認識しているとの指摘 (No. 1、2、13、15、16、

第3表 安全安心マップの作成を通じて、地域の安全安心について気付いたこと

No.	記述内容
1	信号のない交差点が多い
2	交通事故が実際起きたわけではないがヒヤリハットが多い
3	子供にとっては見えにくい場所がある
4	ガードレールが少なく危険
5	住宅の区画が大きいで気配が無い。スピードを出してはしる車多い。
6	危険な地域が多いので学区で独自の防災マップを作って目にとまるよう掲示がある。
7	避難所までの移動に時間がかかる
8	ハザードマップで確認したことで、思いの外危険地帯が身近にあると気付いた。
9	いつ事故に巻き込まれるかわからない
10	体の不自由さにもいろいろな度合いがあるのですべてにおける安全は難しい。
11	狭い道が多く、人・自転車・車の交通量も時間帯によって変わる
12	マンションが多く、声をかけたくても人がいない。人間が見えない。
13	注意して通行すべき場所がそれなりに存在している事
14	交通量が多いので、通行する場所が分散できたらいいと思った。
15	地域に信号が1基しかなく、ドライバーと歩行者のゆずりあいの気持ちが重要である。
16	細い道も多く、街頭が少ない場所が多くあった。
17	日常生活から、安全を守るために学んでおくことが大事だと思います。
18	かつて田んぼだったところを宅地にしている地域なので、地盤はよくないだろうと思っていたが、小学校が液状化の危険が極めて高いところにあるのは驚いた。(今回マップの範囲外ですが、実際に避難するときは、小学校ではなく公民館に避難しようと話し合いました)
19	子どもが歩道を渡ろうと手を挙げても、車の人はなかなか気づいてくれない。
20	サイレンが大音量である意味が分かった。
21	避難所や街の通路がきちんと整備されている

数字はアンケート番号

第4表 地域の安全安心に対する応募代表者と児童との認識の違い

No.	記述内容
1	大人よりも早く熱でやられるのでカフェや自販機の必要性を実感していました。
2	親が思っている以上に、子供らで勉強して通学路を使っていた事。
3	違いはありませんでした
4	子は交通安全を重視していましたが、親は声かけや案件や不審者情報が気になりました。
5	標識に意味があることを知らず、単なる看板と思っていた。
6	子供にとっては見えにくい場所がある
7	ないです。
8	親) 信号の無い交差点(ロータリー)で車の一時停止線を見逃して横断歩道に突っ込んで来る車多し。子) その様な事は感じた事はない。
9	特にはないが、家からの非難と登下校でも避難があった場合の避難所の場所が土砂・洪水で違うので今回とても勉強になった。
10	子どもは歩行者と自転車の目線でしか考えられず、車で運転する人の立場も考えるよう話した。
11	親と子の避難所までの距離感の違い
12	大人目線で考えると、川沿いでありながら「危険度」としては思いの外低かったと思ったが、子供目線では「危険度」ではなく「危険となる可能性がある土地」として認識したことで、リスクの認識につなげることが出来た様だ。
13	子どもの方が登下校時の危険を把握している。
14	点字ブロックの設置の充実さの条件が違った。たくさん設置すればいいわけではなく、安全な箇所のみ安全に設置する必要がある。
15	私：川が近くて景観が良い 子：川が近くて氾濫したら危険
16	大人では気づかない場所に小さな危険が潜んでいると思った。
17	特にない。
18	特になかった
19	特になかったです。
20	子供にとっては、津波というイメージがゼロであったので、あえてゆうならば経験済(親)の者と未知(子供)の者が違いでした。
21	水路(自宅のすぐ前、登校時の集合場所の真下)で児童はよく遊んでいるが、親から見ると危なく感じることもある。(特に登校時の集合でほかの子を待っている間、水路に入って遊んでいることがよくある)
22	前々から「あぶない」とは注意していた歩道であったものの、実際に子どもたちが自分で調べる中で、子どもたちがどんな所が危ないのか、と自分で考え気付きはじめた。
23	子供にとっては昼にサイレンが鳴るのは当たり前だが、都会ではそれが無いこと。
24	昔から根拠もなく安全な場所だと思っていた場所でしたが、子どもの方が危機感を持ち積極的に調べ認識していました。
25	特になし

24) と、子どもに対して大人が説明を加えることで脅威を指摘した、または子どもが脅威を認識するきっかけとなったという点 (No. 4、5、8、10、12、20、21、22) の2つの特徴がみられた。その他にも、特に違いがなかったという指摘も6件あった。

4. 地域の安全安心に関する取り組み

地域の安全安心に関する取り組みとしてどのような活動が重要だと思うかについて、3つほど挙げてもらったところ (n=30、最大3つを選択) (第5表)、「地域内での情報の共有」が14件 (46.7%) と最も多く、「家庭での防災・防犯教育」が13件 (43.3%)、「災害時の避難経路の確保」が11件 (36.7%)、「学校での防災・防犯教育」が9件 (30.0%) と続いた。過去4年間の調査でも上位1位から4位で選択されている「地域内での情報の共有」、「学校での防災・防犯教育」、「家庭での防災・防犯教育」が重要な活動として認識されており、この傾向は今年度の回答からも強くみられ、応募代表者が重要視している項目群であるといえる。その反面、今年度はマップ作りを通して新たに災害時の避難経路の確保の重要性を認識した応募代表者も多くみられた。

地域の安全安心に関する取り組みとして実際に災害や犯罪を防ぐために地域で取り組まれている活動 (n=30) についてみると (第6表)、「家庭での防災・防犯教育」が17件 (56.7%) と最も多く、次いで「学校での防災・防犯教育」と「住民同士のあいさつ」が15件 (50.0%)、「防犯関連グッズの携帯 (児童向け)」が14件 (46.7%)、

第5表 地域の安全安心に関する取り組みとして重要だと思う活動

	度数	割合
住民同士の挨拶	8	26.7%
地域内の清掃	4	13.3%
地域内での情報の共有	14	46.7%
住民によるパトロール	1	3.3%
警察官による巡回	5	16.7%
集団登下校	3	10.0%
学校での防災・防犯教育	9	30.0%
家庭での防災・防犯教育	13	43.3%
地域の防災訓練への参加	8	26.7%
災害時の避難経路の確認	11	36.7%
防犯グッズの携帯 (児童向け)	6	20.0%
家庭での防災グッズの常備	7	23.3%
家庭での耐震の補強	2	6.7%

n=30

第6表 災害や犯罪を防ぐために地域で取り組まれている活動

	度数	割合
住民同士の挨拶	15	50.0%
地域内の清掃	11	36.7%
地域内での情報の共有	6	20.0%
住民によるパトロール	8	26.7%
警察官による巡回	3	10.0%
集団登下校	9	30.0%
学校での防災・防犯教育	15	50.0%
家庭での防災・防犯教育	17	56.7%
地域の防災訓練への参加	7	23.3%
災害時の避難経路の確認	10	33.3%
防犯グッズの携帯 (児童向け)	14	46.7%
家庭での防災グッズの常備	13	43.3%
家庭での耐震の補強	11	36.7%

n=30

「家庭での防災グッズの常備」が13件 (43.3%)、「地域内の清掃」、「家庭での耐震の補強」が11件 (36.7%) と続いた。前述の地域の安全安心に関する取り組みとしてどの活動が重要か3つ挙げてもらった際には、上位に出てこなかった「住民同士のあいさつ」や「地域内の清掃」、また防犯関連グッズの携帯や準備が入っていることから、普段から個人・地域レベルで防犯・防災対応への備えができていた様子が明らかになったといえよう。

5. マップ作成の意義と課題

安全安心マップを作成する意義 (n=27) についてみると (第7表)、実際に身近な通学路や街並みを歩き、子ども自身の目で現地の状況を確認し、脅威となりうるポイントなどを認識できる点が挙げられている。回答者の意見は、子どもや大人だけでは気付かない／気付けないポイントや安全対策について、共通の認識を持ちつつ、視点の違いを指摘することによって得られる意義についての指摘が共通していた。

一方、安全安心マップを作成する上での問題点 (n=22) についてみると、「低学年だとまずまず作成が大変だった」、「上記の話し合いをマップには十分に反映できなかった」という地図作成における児童主体での情報記入の難しさや、様々な年代や問題を抱えている人の視点や意見を反映することの重要性についての指摘があった。その他、「ネット検索するとたくさんの情報が出てくるが、情報が地域ごとにまとまっておらず、点在していたり、どの情報が最新で、どの情報をいざという

第7表 安全・安心マップを作成する意義（自由記述）

No.	記述内容
1	身近な場所に危険があることや、災害時にどう行動すればよいか考えることで生きた知識が得られる。
2	通学路の危険リスクの再確認や、大人と子供との視点の違いを学べる機会。
3	子供と共に、地域の安全対策について再考することができた
4	いつも何気なく歩いている道を改めて親子で確認することが出来た。広い町内なので、車で通過することも多いので、現場を目視する意義はあった。
5	子供が小学校や自宅の周りの道について詳しくなり、道路状況、標識の意味を学ぶ機会になる
6	子供に危険なところを認識させることができる。
7	通学路の危険場所を確認しなかったから。
8	親子で共通の意見や体験を持つ事ができる。
9	作成することで、被災した時のシミュレーションにもなり、子供にも分かりやすく、また伝わりやすいので、どういのちを守るかを考えるキッカケ作りになる。
10	安全・安心への意識の向上
11	いつ災害が起きるかわからないため、可能性がある災害について行動指針の一環となる。
12	再度地域の危険を認識することができる
13	いざという時のために常日頃から近所の安全に意識を持つことができる
14	幸いなことに、私たちの地域は平地、近くに海・川・山がなく、自然災害の恐れは比較的少ないです。しかし、道路上での気づきを親子で一緒に確認し、交通ルールを守る大切さを学んでほしいです。
15	現時点での子の目に映る景色を共有できているか、どう見えているのかを知ることが出来る。
16	子供が自分の住んでいる地域に関して関心を持ったきっかけになった。具体的に対策を自分で考えるようになった。
17	地域の安全について考える機会になる。より詳しく“この場面で地震が起きたら”と具体的にイメージして話し合った。
18	普段、何気なく通行する場所も危険なところはないか？再認識できるところ（子どもと共に）
19	普段何気なく通っている道が本当に安全なのか、もっと良い道があれば、そちらを利用するようにしたいと思う良いきっかけになった。
20	震災後コミュニティがゼロになった為、地域の目がないので子供自身が危ないと思うことを自ら学ぶ為に行いました。
21	実際に自分たちの目で見て確認してみる事で、普段の生活ではあまり気づかなかった事を確認できた。
22	普段気づかないことを知る、良い機会になる。(工事中のため砂利になっていて歩くと危ない、など)
23	親や学校から「あぶない」と注意され、理解している「あぶない」が、安全マップを作ることで自分自身の認識した「あぶない」に変化した。
24	サイレンの音を測定するためにいろいろ回り、あらためて市内の地形や防災の難しさを親子ともども理解できた。
25	自分達の住んでる街での安全や安心のための工夫に気付くことが出来る。
26	足を運び地域状況を把握する事により防災意識を高める事が出来る。
27	子どもの視線で考え、危険に気づききっかけになる。子供が自分で調べ、地域に目を向けるきっかけになる。

n=27

時の参考とすべきか、分かり辛そうと感じた]、「ただ地図を作るだけでは、なぜ土砂災害が起きやすいのか伝わりにくかったので、降水量を確認したり豪雨の原因も考えることでさらに子供がどう行動すべきか学べたと思う」のように複数の情報を処理する方法に関する課題も複数指摘された。また、参加している児童だけでなく近隣の人々のプライバシーに配慮した情報の描き方や、炎天下や夜の情報収集における難しさについても指摘があった。テクニカルな点では、手書きかつ指定のサイズの紙でマップを用意することの難しさについても複数の指摘があったことを挙げたい。また、夏休みの時期にかけての募集であることから「半年以上が冬で、冬を中心

とした都市計画がされています。冬にも募集ができればよい良いと思います」といった地域特有の季節的な移り変わりに言及したコメントもあった。これらの課題に対して当研究所のウェブサイトでは、マップコンテストを作成するうえで参考にしてほしいとして「安全安心マップ かんたんマニュアル」などを案内しているほか、前述の出張講義などの場での相談対応をすることも考えられる。

V. おわりに

本稿では、2023年度で第17回目を迎えた立命館大学

歴史都市防災研究所の主催する「みんなでつくる地域の安全安心マップコンテスト」事業について、内容を整理・紹介しながら、その成果と課題を以下の通り検討した。

- ①全国から33点、総勢41名の参加があり、例年通り自然災害や交通事故に着目した地図が多く提出されたが、普段の生活圏で社会的弱者にとって不便な状況を具体的に示したものや、サイレンの聞こえ方に着目したもの、開かずの踏切に着目したものなど、身の回りの防犯・防災の課題にじっくり取り組んだ作品もみられ、その中から入賞作品10点が選出された。
- ②参加者の多くは、例年と同じく宿題や夏休みの課題として取り組むことと、地域の安全安心や防災・防犯への関心から本コンテストに取り組んでいることが明らかとなった。本コンテストに関する情報は「学校の配布物」の他「歴史都市防災研究所のホームページ」を含むインターネットから得られていることを踏まえ、来年度の広報に工夫したい。
- ③地域の安全安心に対する認識に関する質問群のうち、安全安心マップの作成を通じて地域の安全安心について気付いた点として、交通事故につながる可能性のある場所・道路・状況や、ハザードマップや避難場所など災害を想定した対応、サイレン、身体の不自由な人のアクセスが挙げられた。地域の安全安心に対する応募代表者と児童との認識の違いについては、両者間に生ずる認識の違いについての指摘が多く、子どもの方が脅威を認識しているという指摘と大人が脅威を指摘する必要性を指摘している2種類の答えに分かれたのが印象的であった。
- ④地域の安全安心に関する取り組みとして、「地域内での情報の共有」、「家庭での防災・防犯教育」、「災害時の避難経路の確保」、「学校での防災・防犯教育」の順で重要だと思う活動が指摘されたが、これらの割合は実際に災害や犯罪を防ぐために地域で取り組まれている活動のトップである家庭や学校での防災・防犯教育とも一致している。しかし、実際に行われている対策としては、地域とのつながり（住民同士のあいさつや清掃）や防犯・防災関連グッズの携帯や準備、耐震補強なども挙げられており、既にある程度対策が取られていることも伺うことができた。

- ⑤マップ作成を通じて子どもと大人と一緒に住み慣れた土地を歩き、自身の目で現地の危険や安全について意見交換・情報共有しながらマップを作成できる点について意義があると言及されている回答が多く確認され、普段の生活では話さないが安全安心について児童がどのような考え方を持っているのかを知ることができた、という指摘も複数あった。一方で、地図作成の技術的、物理的な難しさやプライバシーへの配慮のほか、個人の属性や立場の違いによって見方・考え方が異なる可能性を理解し議論できる場の創出については例年と同じく課題として挙げられていることから本コンテストを運営していくにあたって改めて配慮すべきであろう。

既存の研究でも述べられている通り、学校における防災教育の重要性は認識されているものの、学校での災害や気候変動に関する専門的な知識やツールの補強は重要である。本コンテストは夏休みの自由研究や学校の教育を補完する手段として利用されており、児童が暮らす地域を歩きながら様々な情報と合わせて具体的に調べることで、地域に根差した防災計画の作成につながっている。また、地元の人たちへのインタビューや会話を通じてコミュニティでの防災意識を高めることにも間接的に寄与している。さらに、防災の専門家がそれぞれの作品を評価し、講評することで、コンテストそのものが児童や家族、学校に対する専門的な視点や知見の伝達の場ともなっている。これは、先行研究で指摘されていたコミュニティや家庭での防災意識を高めるための手段の不足や専門知識の欠如を補うものであり、マップコンテストが学校における防災教育のツールとなることを示す。今後、この教育・伝達機能をさらに強化するため、たとえば広報や出張授業の際、審査委員による講評が掲載されている事業報告²¹⁾を活用してマップ作りのポイントを紹介することで、効果的な安全安心マップとはどのようなものなのかをより多くの児童、家庭、学校、コミュニティに認識してもらうことができるのではないだろうか。マップコンテストの運営を専門機関である大学が行うことの意義はそこにある。

注

- 1) ① Dal Zilio, L. & Ampuero, J. "Earthquake doublet in Turkey and Syria", *Communications Earth & Environment*, Vol.4, No.71, 2023, <https://www.nature.com/articles/s43247->

- 023-00747-z (last accessed 13 November 2023), ② United Nations. "Türkiye-Syria Earthquake Response", United Nations website, 2023, <https://www.un.org/en/turkiye-syria-earthquake-response> (last accessed 13 November 2023).
- 2) ① United Nations, "'A mountain of hardship', as Afghanistan suffers yet another earthquake", United Nations website, 2023, <https://news.un.org/en/story/2023/10/1142402> (last accessed 13 November 2023), ② Yunus Yawar, M. "Afghan earthquakes kill 2,445, Taliban say, as deaths mount", Reuters website, 2023, <https://www.reuters.com/world/asia-pacific/afghanistan-earthquake-death-toll-500-red-crescent-2023-10-08/> (last accessed 13 November 2023).
- 3) UN-OCHA. "Nepal: Earthquake- Nov 2023", Relief Web website, 2023, <https://reliefweb.int/disaster/eq-2023-000214-npl> (last accessed 13 November 2023).
- 4) Milman, O. "After a record year of wildfires, will Canada ever be the same again?", Guardian website, 2023, <https://www.theguardian.com/world/2023/nov/09/canada-wildfire-record-climate-crisis> (last accessed 10 November 2023).
- 5) Stamos, Prousalis, Alexandros & Avramidis. "Greece battles Europe's deadliest fire of the summer for 10th day", Reuters website, 2023, <https://www.reuters.com/world/europe/greece-battles-europes-deadliest-fire-summer-10th-day-2023-08-28/> (last accessed 10 November 2023).
- 6) Carbonaro, G. "Wildfires: Hundreds evacuated in Italy's Sardinia as fires rage in Portugal and Cyprus", Euronews website, 2023, <https://www.euronews.com/2023/08/07/more-than-600-people-evacuated-as-wildfires-rage-across-italys-sardinia> (last accessed 10 November 2023).
- 7) ① Pinedo, E. and Gutiérrez, M. "Hundreds evacuated as strong winds fan wildfire in eastern Spain", Reuters website, 2023, <https://www.reuters.com/world/europe/hundreds-evacuated-strong-winds-fan-wildfire-eastern-spain-2023-11-03/> (last accessed 10 November 2023), ② Suarez, B. "Thousands evacuated on Spain's Tenerife as summer wildfire re-ignites", Reuters website, 2023, <https://www.reuters.com/world/europe/thousands-evacuated-spains-tenerife-summer-wildfire-re-ignites-2023-10-05/> (last accessed 10 November 2023).
- 8) Williams, A., Pettersson, H., Rigdon, R., Alwahab, C., Chacon, M. & O'Kruk, A. "'Everything was on fire' The hours that brought Lahaina to ruins", CNN, 2023, <https://edition.cnn.com/interactive/2023/08/hawaii-wildfires-timeline-maui-lahaina-dg/index.html> (last accessed 10 November 2023).
- 9) 気象庁 (2023) 「令和5年新着情報」. <https://www.jma.go.jp/jma/press/kako.html?t=1&y=05> (last accessed 13 November 2023).
- 10) 気象庁 (2023) 「令和5年の実績～線状降水帯による大雨の半日程度前からの呼びかけ～」. <https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/jirei/senjokousuitai/R05jisseki.pdf> (last accessed 13 November 2023).
- 11) 気象庁 (2023) 「春の日本の平均気温と日本近海の平均海面水温の記録的な高温について～統計開始以降最も高い平均気温～」. https://www.jma.go.jp/jma/press/2306/01c/temp_MAM.html (last accessed 13 November 2023); 気象庁 (2023) 「夏(6～8月)の天候」. <https://www.jma.go.jp/jma/press/2309/01b/tenko230608.html> (last accessed 13 November 2023).
- 12) 気象庁 (2023) 「令和5年5月の地震活動及び火山活動について」. <https://www.jma.go.jp/jma/press/2306/08a/2305jishin.html> (last accessed 13 November 2023).
- 13) 気象庁 (2023) 「令和5年6月の地震活動及び火山活動について」. <https://www.jma.go.jp/jma/press/2307/10d/2306jishin.html> (last accessed 13 November 2023).
- 14) 気象庁 (2023) 「令和5年10月の地震活動及び火山活動について」. <https://www.jma.go.jp/jma/press/2311/09a/2310jishin.html> (last accessed 13 November 2023).
- 15) 国土交通省 (2023) 「令和5年全国の土砂災害発生状況(10月31日時点)」. <https://www.mlit.go.jp/river/sabo/jirei/r5dosha/20231031jiten.pdf> (last accessed 13 November 2023).
- 16) Bonifacio, A., Takeuchi, Y., & Shaw, R. (2010). "Chapter 7 Mainstreaming climate change adaptation and disaster risk reduction through school education: Perspectives and challenges," in: Shaw, R., Pulhin, J.M., & Pereira, J.J., eds. *Climate Change Adaptation and Disaster Risk Reduction: Issues and Challenges*. Vol. 4. Emerald Publishing Ltd..
- 17) ① Nurdin, N., Rafflesia, I., Hidayati, S., Oktari, R.S., & Djalante, R. (2017). "Integrating Disaster Risk Reduction and Climate Change Adaptation into School Curricula: From National Policy to Local Implementation," in: Djalante, R., Garschagen, M., Thomalla, F., Shaw, R. (eds) *Disaster Risk Reduction in Indonesia. Disaster Risk Reduction*. Springer, Cham. https://doi.org/10.1007/978-3-319-54466-3_8, ② Finnis, K., Johnston, D., Ronan, K., & White, J. (2010). "Hazard perceptions and preparedness of Taranaki youth," *Disaster Prevention and Management*, 19 (2), pp.175-184.
- 18) 立命館大学歴史都市防災研究所編 (2017) 『小学生を対象とした「地域の安全安心マップコンテスト」10年間の歩み』、立命館大学歴史都市防災研究所。
- 19) 村中亮夫・花岡和聖 (2023) 「安全安心マップ作成を通じた子どもの防災・安全教育の実践—第16回みんなで作る地域の安全安心マップコンテスト事業報告—」京都歴史災害研究 24、29～37頁。
- 20) ①石田優子・酒井宏平・村中亮夫 (2020) 「安全安心マップ作成を通じた小学生親子の防災力向上と課題—第13回みんなで作る地域の安全安心マップコンテスト関連事業報告—」京都歴史災害研究 21、31～41頁、②酒井宏平・大橋弘明・Shakya Lata・村中亮夫 (2021) 「安全安心マップ作成を通じた防災力向上と課題—第14回みんなで作る地域の安全安心マップコンテスト」の事業報告—」京都歴史災害研究 22、49～56頁、③大橋弘明・Cheek Wesley Webb・村中亮夫 (2022) 「安全安心マップ作成による地域防災力の向上のための課題に関する考察—第15回みんなで作る地域の安全安心マップコンテスト」の事業報告を通して—」京都歴史災害研究 23、29～38頁、④村中亮夫、花岡和聖 (2023) 「安全安心マップ作成を通じた子どもの防災・安全教育の実践—第16回みんなで作る地域の安全安心マップコンテスト事業報告—」京都歴史災害研究 24、29～37頁。
- 21) 立命館大学歴史都市防災研究所 Web サイトでは、2016年に開催された第16回コンテスト以降、毎年発行されている事業報告が公開されており、その中に入賞作品に対する審査員の講評が掲載されている。「論文・事業報告」立命館大学歴史都市防災研究所 Web サイト. <https://r-dmuchi.jp/project/mapcontest/thesis/> (last accessed 23 January 2024).